

このお便りは私が担当している太極拳教室のみなさんに毎月お届けいたします。

## けんこうもうごろく 健康妄語録

### 医療関係者にも戸惑い——臓器移植の話・その2——

日本において臓器移植法が施行された1997年以降、脳死患者からの臓器の提供者（ドナー）はわずか37名に過ぎません。一方、臓器移植待機患者は12328名とされています。（何れも2005年3月末現在）こうしたことからもっとも提供者（ドナー）を増やす必要があると、「脳死者本人の生前の意思にかかわらず脳死は一律に人の死とする」とする改正案が国会に出されようとしています。

ところが、臓器提供や臓器移植に携わる医療関係者約5000人に対して厚生労働省が昨年行った意識調査ですら、「脳死は妥当な死の判定法か」との質問に対して、『はい』が39%、『いいえ』が15%、『分からない・無回答』が47%ということだということです。当事者の過半が否定的、懐疑的であることに驚ろかされます。それだけ医療現場には戸惑いがあるのでしょう。

さらには先月号でもご紹介したように、当事者中の当事者のひとつである日本看護協会では、“**脳死は人の死とは認められないから、大幅な改正には基本的に反対する**”との見解を表明しているのです。（2005年4月27日発表）

臓器移植の先進国？である欧米でも、「脳死がはたして人の死なのか」あるいは「脳死の判定法に不備があるのではないのか」という疑問は、あまたの脳死移植手術の現場からも、また宗教関係者などからも、次々と提起されています。もっとも一方では、より提供者をふやすためには脳死者のみならず植物人間患者（自力呼吸をしている！）をも、死者とみなしてドナーの対象に加えるべきだと主張する恐るべき医療関係者もいるようですから、ことは簡単ではありません。

「脳死は人の死」という理論には、脳は他の臓器とは別格の“有機的統合機能を有している”ので、脳が死ねば遠からずかならず死ぬ、つまりこれは死んだと同然だという大前提があります。

ところが、実際には、移植手術をされる脳死者のさまざまな生体反応が、あまりにも生々しいがゆえに、（たとえば、血圧の急上昇急降下、頻脈、発汗、複雑な手足の動きなどなどから、脳死者が傷みや恐怖を感じているのではないかという疑問）、現在ではモルヒネやガス麻酔などで、完全に脳死者を“眠らせた”うえでないと臓器摘出手術を行うことが出来ないということです。

こういう現実の中から、「脳死と判定されていても、実は脳の一部はまだ生きていますので、このような反応が出るのだらう」という意見や、「たとえ脳が死んだとしても、心臓をはじめとする他の臓器は有機的統合性を失わずに機能しているのだから、人の死とは認められない」という見解があらためて出されているのです。たとえば、幼児の脳死者の中には300日以上も生き続けたという例も幾つも報告されています。

またより根源的な問題として、人間の「意識」「こころ」「たましい」というのは脳にあるのか、または心臓にあるのかというテーマがあります。ほとんどの民族の持つ言語では「心」と「心臓」は同一ですね。Heart は心臓でもあり心をも意味します。「失恋」は「broken heart」ですし「誠意」は「heartiness」です。心臓にもし「こころ」が宿っているとすると、生きた心臓を他人に移植するとどうなるのか、次号はそういう問題にも触れてみたいと思います。 .

## 用語解説 きちんたんでん 気沈丹田

楊名時太極拳の『稽古要諦』の最初に出てくる言葉です。言葉の直接の意味は「気を丹田に沈める」ということです。丹田とは気功で使われる概念ですが、上丹田（眉の間）、中丹田（胸乳の間）、下丹田（へその下）と3箇所あります。ただ「丹田」という時にはふつう下丹田のことを指します。ここに気を集める、貯めることが気功法の原点です。ごく単純化して言えば、集めた気を全身に巡らすのが内気功、外へ放射するのが外気功となります。

気を丹田に集めるには、吸う呼吸に連動させます。「吸った気を丹田に落としこむように」とも言いますが、この「気」は吸う空気でもあり取り込む気(エネルギー)でもあると考えたら判りやすいと思います。(頭頂の「百会」というツボから気を取り込むのもよくある方法です。)

太極拳を演武するとき、初心者のうちは呼吸が浅いこともあって、とかくふわふわと浮き足立った、膝の伸びた腰高な姿勢になりがちです。「気沈丹田」をつねに意識すると、自然に重心も下がってきて「上虚下実」の姿勢にもなってきますし、気功健康効果も一層向上します。

## 旅をうたい拳を詠む

私が短歌というものを作り始めたのは、ベトナム滞在中の1998年です。この国の風土や社会におおいに感性を刺激されてのことです。恐いもの知らずで朝日新聞の「朝日歌壇」にはるばる投稿しましたところ、思いがけず最初の投稿歌から入選して新聞に掲載されました。「朝日歌壇」は佐々木幸綱、近藤芳美、島田修二、馬場あき子の4人の有名歌人が選者（当時）で新聞の短歌欄の中ではもっともハードルが高いと言われていましたので、自分でも本当にびっくりしました。けっきょく帰国するまでに8首ほど入選しましたが、今となっては本当に良い思い出です。

入選歌のいくつかをご紹介します。

ヘミングウェイの映画あるらし校門にアオザイの娘ら集う夕暮れ（佐々木、近藤両先生選）

自転車に鳥籠五つ六つ載せ木陰に止めて客待つ小鳥や（馬場先生選）

濃紺の揃いのアオザイひるがえし三人乗りが駆け抜ける朝（近藤、島田両先生選）

キムヨンジャの「暗夜航路」など聞くままに独り寝る夜の習いとなりしも（近藤先生選）

英字紙に倦みて見上ぐる峯雲を信濃の夏の雲として見る（佐々木先生選）

## 遊印遊語

最近評判となっている「生きて死ぬ智慧」（心訳・般若心経）を読みました。著者である生命科学者の柳澤桂子さんは、“宗教は科学で説明出来る。出来ないのは、科学がそれだけ遅れているからだ”とテレビで話していましたが、まさにこの本は般若心経の中心命題「色即是空」を科学者が科学的に解き明かした書であると言えます。

「心無罣礙」はその般若心経の一節にある、昔から私が好きな言葉です。この印もいまから13年ほど前に彫ったものです。「罣礙」は妨げになる、邪魔になるという意味ですが、柳澤さんは、——（「空」というものを正しく理解しその智慧を身につければ）心を覆われることなく（野の花のように）生きていきます——と訳されています。

